

本学における「女性研究者研究活動支援事業」3年間の事業活動の成果を総括し、今後の事業継続について検討するため、自己評価と第三者委員による外部評価委員会を実施しました。2月29日に実施された第三者評価委員会には中央大学大学院戦略経営研究科教授の佐藤博樹先生、東京女子医科大学名誉教授の川上順子先生、板橋区男女社会参画課の藤田真佐子課長、帝京大学より滝川一医学部長、寺本民生臨床研究センター長、元埼玉労働局長である法学部村上文教授にご就任いただき、3年間の事業成果に関する高い評価と、さらに効果的に女性研究者支援を推進するためのさまざまなヒントを頂戴しました。これらを踏まえ、評価の過程で見えてきた問題点や改善すべき項目について対応を検討し、平成28年度計画に織り込むとともに、活動を継続・発展させるため、後述の通り運営体制の強化を行うなど、男女共同参画推進ならびに女性研究者支援の発展に引き続き努めています。

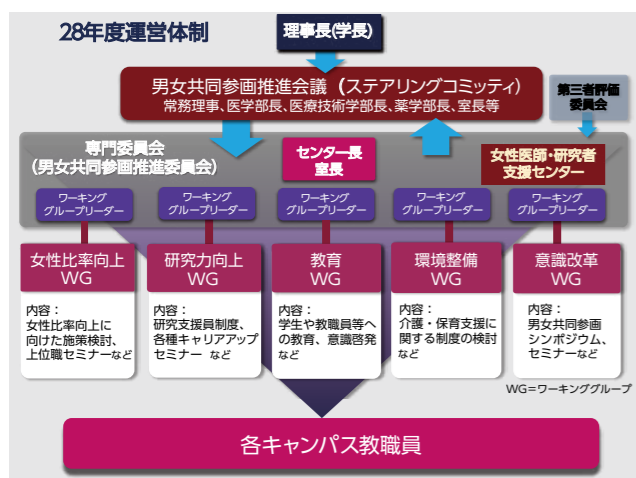
今後の運営体制について

平成28年度より組織強化に向け各学部長・事務長を構成員に加えた「男女共同参画に関するステアリング・コミッティ」を設置し、その下に現在の男女共同参画推進委員会と女性医師・研究者支援センターを置くことになりました。さらに、男女共同参画推進委員会内に意識改革、環境整備、研究力向上など5つのワーキンググループを立ち上げ、各ワーキンググループにおいて課題を検討するとともに、学生や職員への意識啓発や相談窓口機能強化などの実務施策に取り組んでまいります。

平成28年度男女共同参画推進委員会

平成28年度の男女共同参画推進委員会は下記委員により運営されております（50音順、敬省略）。

沖永 寛子	センター長	常務理事・副学長
野村 恭子	室長	医学部衛生学公衆衛生学講座准教授
新井 直子		医療技術学部看護学科准教授
池田 結佳		医療技術学部視能矯正学科講師
池淵 恵美		医学部精神神経科学講座主任教授
稲垣 宏治		医学部附属病院総務課長
海野 雄加		医学部微生物学講座助教
金子 希代子		薬学部医薬化学講座臨床分析学研究室教授
川上 淳之		経済学部経済学科准教授
川崎 義隆		医学部附属病院ME部係長
顧 艶紅		公衆衛生学研究科公衆衛生学研究科講師
高山 優子		理工学部バイオサイエンス学科講師
多田 弥生		医学部皮膚科学講座准教授
楯 直子		薬学部医薬化学講座基礎化学研究室教授
田村 元男		本部人事課課長
土谷 明子		医学部附属病院看護部看護部長
利根川 豊		板橋キャンパス事務部事務次長
中西 穂高		知的財産センター教授
橋本 敏克		本部総務課課長
船坂 則夫		本部事務長
村上文		法学部法律学科学教授
渡邊 靖		福岡医療技術学部事務部課長



★センターからのお知らせ

第4回学内アンケート  
ご協力をお願い

学内便にてお手元に届き次第、ご協力いただきますようお願いいたします。結果は当センターホームページに掲載予定です。

各種相談窓口  
ご利用ください

キャリアデザインやライフイベントなど、女性に関するあらゆる相談を行っています。誠意を持って対応いたしますのでお気軽にご相談ください。

DVD・書籍貸出しの  
ご案内

キャリアデザインやワーク・ライフ・バランス、福祉政策など男女共同参画理解に役立つ本や資料、DVDの貸出しをしています。お気軽にお立ち寄りください。

帝京で働く女性のための  
カフェ・タイム

毎月8日は女性が集まるカフェタイムの日です。新しい仲間づくりに参加しませんか。  
毎月8日12:15～  
(土日祝はお休み)

■お問い合わせ先

帝京大学女性医師・研究者支援センター 〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1 病院棟6階

Tel. 03-3964-8456/Fax. 03-3964-8457/E-mail: women@med.teikyo-u.ac.jp

開室曜日・時間: 月～金 9時～17時 ※掲載情報は2016年12月現在のものです。編集: 仲山/関屋



帝京大学女性医師・研究者  
支援センターNEWS

Teikyo University Support Center for  
Women Physicians and Researchers



帝京大学女性研究者研究活動支援事業  
総括シンポジウムを開催

帝京大学が平成25年度から3年間にわたって実施してきた「女性研究者研究活動支援事業」を総括するシンポジウムを2月20日に開催しました。

沖永寛子常務理事・副学長、帝京大学女性医師・研究者支援センター長の開会の挨拶に続き「帝京大学における女性研究者研究活動支援事業の取組成果と今後の展望」をメインテーマとし、本事業管轄団体である科学技術振興機構(JST)科学技術プログラム推進部プログラム主管の山村康子氏に基調講演を、埼玉県立大学理事長江利川毅氏に特別講演をいただきました。山村氏からは「女性研究者支援・養成事業の実績と今後の動向」と題し、本支援事業の紹介と今後の展望、帝京大学への期待を、江利川氏からは「大学とはどうあるべきか(女性の活躍も含め)」と題し、内閣府・厚生労働省等で舵取りされた経験や大学経営者の立場から、大学における男女共同参画・女性支援についてをそれぞれお話しいただきました。

後半には本学の取組として、研究支援員の事例紹介と女性センターが行っている環境整備のためのエビデンス構築事例「大学教員におけるハラスメントがバーンアウトに与える影響」「研究におけるメンターの重要性」についての報告がありました。研究支援員制度に関しては、活動の紹介や本制度によって得られた経験を研究者と研究支援員それぞれの立場からお話しいただきましたが、公衆衛生学研究科井上まり子講師と支援員の堀江早喜さん、医療技術学部看護学科麻生保子准教授と公衆衛生学研究科大学院生櫻井純子さんから、研究者側だけでなく、支援する側の研究支援員のキャリア構築にもつながる側面があることが報告され

ました。最後に、沖永佳史理事長・学長が開会の挨拶を述べ、70名を超す参加者のもと、シンポジウムは盛会裏に終了しました。

シンポジウム概要

平成28年2月20日(土) 帝京大学医学部附属病院大会議室

- ◆開会挨拶 沖永寛子氏  
(常務理事・副学長、女性医師・研究者支援センター長)
- ◆基調講演 山村康子氏  
(科学技術振興機構科学技術プログラム推進部主管)
- ◆特別講演 江利川毅氏  
(元人事院総裁、厚生労働事務次官、現埼玉県立大学理事長)
- ◆研究支援員事例紹介  
井上まり子氏(大学院公衆衛生学研究科講師)  
堀江早喜氏(女性医師・研究者支援センター研究員)  
麻生保子氏(医療技術学部看護学科准教授)  
櫻井純子氏(大学院公衆衛生学研究科専門職課程1年)
- ◆環境整備エビデンス構築  
「ハラスメントとバーンアウト」  
野村恭子氏(女性医師・研究者支援センター室長)  
「メンターと研究環境整備」  
竹之下真一氏(大学院公衆衛生学研究科専門職課程1年)
- ◆総括 野村恭子氏(女性医師・研究者支援センター室長)
- ◆閉会挨拶 沖永佳史氏(理事長・学長)



# 「育児・介護と職場環境と仕事満足度に関するアンケート調査」結果報告

2016年2月に実施したアンケート調査の結果をご報告いたします。今回のアンケートは教員および附属3病院に所属する職員（医療従事者）を対象に就労、育児・介護状況、仕事への満足度等を把握する目的に実施し、1186人の方にご協力いただきました（回収率32%）。

## 1. 回答者の所属について

回答が得られた1186名のうち、帝京大学の各キャンパス（板橋・八王子・宇都宮・福岡・霞ヶ関）に所属する教員は574名（49%）、附属3病院（医学部附属病院・医学部附属溝口病院・ちば総合医療センター）に所属する者は598名（51%）であった（未回答者14名）（図1）。

キャンパス教員の回答者のうち、医学部に所属している者が最も多かった（男性112名、女性38名）。次いで医療技術学部（男性59名、女性39名）、薬学部（男性25名、女性13名）と板橋キャンパス所属学部（医学部、薬学部、医療技術学部 視能矯正学科/看護学科/診療放射線学科/臨床検査学科/スポーツ医療学科救急救命士コース）の教員の回答が多かった。また、法学部の回答者に女性はいなかった（図2）。

附属3病院に所属する回答者のうち、看護師が最も多く（428名、73%）、次いで技師の回答が96名（16%）であった。医師の回答は21名（3%）であった（図3）。

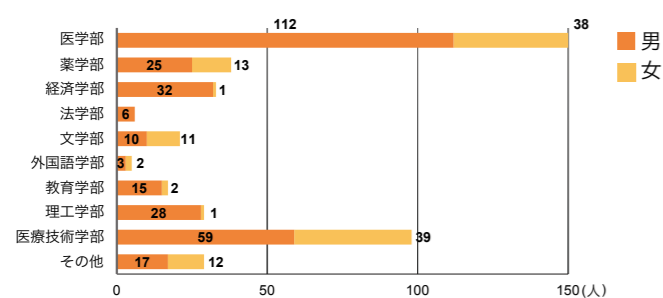
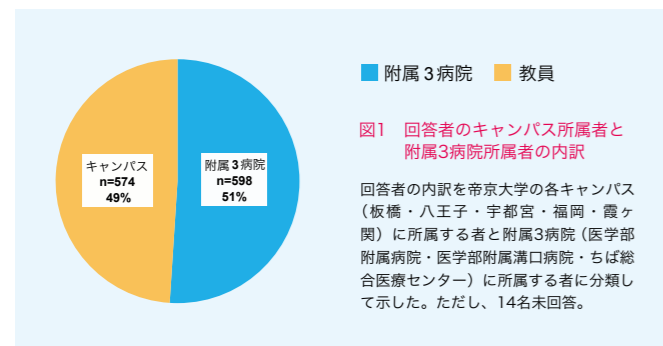
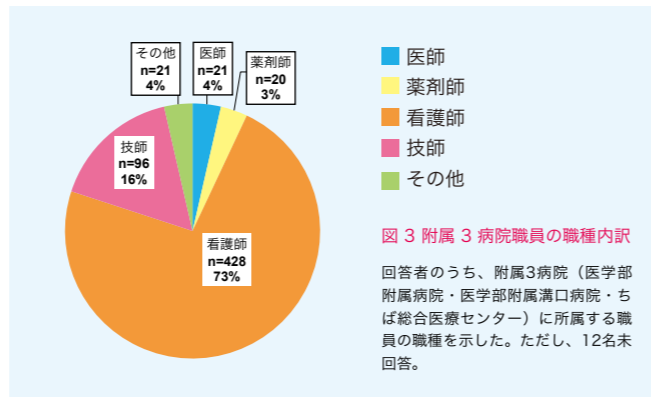


図2 キャンパス教員の所属学内訳（男女別）

回答者のうち帝京大学の各キャンパス（板橋・八王子・宇都宮・福岡・霞ヶ関）に所属する者の所属学部を男女別に示した。ただし、148名未回答。



## 2. 回答者の基本特性

女性の割合はキャンパス教員が234人（41.7%）、附属3病院職員が514人（87.3%）と、年齢はキャンパス教員が平均44.9±13.4歳、附属3病院職員が32.8±9.6歳で有意に教員の方が高かった。婚姻状況については附属3病院職員の未婚率が高く、子どもがいる者も有意に少なかった。介護を行っている者の割合はキャンパス教員の方が有意に多かった。

また、一日の家事を行う時間は、平日、休日ともに附属3病院職員の方が長かったが、性別役割分業意識については所属機関による差はみられなかった。

表1 回答者の基本特性と性別役割分業意識について

	教員 (n=574)		附属3病院 (n=598)	
	n	%	n	%
女性†	234	(41.7)	514	(87.3)
年齢(歳)†	44.9 ± 13.4		32.8 ± 9.6	
未婚†	190	(33.9)	376	(63.5)
子ども有†	298	(55.0)	190	(34.1)
介護有	71	(6.2)	37	(6.3)
一日の家事労働時間(時間)				
平日†	1.76 ± 1.76		2.45 ± 2.17	
週末†	3.63 ± 3.36		4.60 ± 4.49	
性別役割分業意識				
1) 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである。	68	(12.1)	55	(9.3)
2) 女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をするのも同じくらい重要である。	333	(59.4)	343	(58.1)
3) 母親であれば、育児に専念することが第一である。	104	(18.6)	115	(19.5)

連続量は平均値±標準偏差、カテゴリ値については人数(%)を記載した。性別役割分業意識については1)から3)の問いに対して、「ややそう思う」、「とてもそう思う」と回答した人数を記載した。ただし、性別について36名、年齢は43名、婚姻状況は19名、子どもの有無は73名、介護状況は25名、平日の家事時間は31名、週末の家事時間は34名、性別役割分業意識の1)は20名、2)は21名、3)は21名それぞれ未回答。所属機関による有意な差が見られた場合、項目横に記号で示した(\*:P<0.001、†:P<0.0001)。

## 3. 労働状況について

一日の労働時間はキャンパス教員が9.5±2.0時間、附属3病院職員が9.0±1.5時間とキャンパス教員の方が長かった一方、睡眠時間は所属機関間で有意な差はみられなかった。

質問項目を集計し、Job Content Questionnaire (JCQ) を用いてストレス尺度を評価した結果、附属3病院職員の方が仕事の要求度は高く、裁量度は低かった。仕事の要求度が高い一方で仕事の裁量度が低い高ストレーン群の割合も附属3病院職員の方が多かった。仕事の支援度については所属機関間で差は見られなかった。

同様に質問項目を集計しthe Copenhagen Burnout Inventoryより算出した精神的疲労感についても感情疲労(Personal Burnout)、仕事関連精神疲労(Work-related Burnout)、对患者(学生)精神疲労(Client-related Burnout)いずれの項目も附属3病院職員の方が高かった。質問紙によるDSM-VIに基づく原発性不眠症の人数も附属3病院職員の方が多かった。

表2 労働時間と労働に伴うストレスについて

	教員 (n=574)		附属3病院 (n=598)	
一日の労働時間(時間)†	9.5 ± 2.0		9.0 ± 1.5	
一日の睡眠時間(時間)	5.9 ± 1.1		5.8 ± 1.4	
職場のストレス尺度によるストレス強度†				
高ストレーン群	88	(15.3)	196	(32.8)
職場のストレス尺度(点)				
仕事の要求度†	33.8 ± 5.7		35.7 ± 5.0	
仕事の裁量度†	71.1 ± 9.7		64.0 ± 9.0	
仕事の支援度	23.3 ± 4.1		23.0 ± 4.0	
精神的疲労感(点)				
感情疲労†	15.0 ± 5.2		17.8 ± 5.4	
仕事関連精神疲労†	15.7 ± 5.1		18.8 ± 5.6	
对患者(学生)精神疲労†	13.5 ± 4.2		14.7 ± 4.8	
不眠症*	98	(17.1)	134	(22.4)

連続量は平均値±標準偏差、カテゴリ値については人数(%)を記載した。ストレス尺度についてはJob Content Questionnaireを、精神的疲労感についてはthe Copenhagen Burnout Inventoryを用いて評価した(仕事の要求度:48点満点、仕事の裁量度:96点満点、仕事の支援度:32点満点、精神的疲労感:各100点満点)。不眠症についてはDSM-VIに基づく原発性不眠症の人数を記載した。ただし、労働時間について24名、睡眠時間は28名、ストレス尺度のうち仕事の要求度は26名、仕事の裁量度は41名、仕事の支援度は50名、精神的疲労感のうち感情疲労は27名、仕事関連精神疲労は24名、对患者(学生)精神疲労は28名それぞれ未回答。所属機関による有意な差が見られた場合、項目横に記号で示した(\*:P<0.05、†:P<0.0001)。

ご協力いただきました先生方、職員の皆様、誠にありがとうございます。本アンケートで得られた結果を、今後の活動に生かしてまいります。その他の結果については、ホームページをご覧ください。

([http://www.teikyo-u.ac.jp/affiliate/laboratory/support\\_center/activity/report.html](http://www.teikyo-u.ac.jp/affiliate/laboratory/support_center/activity/report.html))

## ロールモデルセミナーを開催

「女性医師・研究者から見た腎の不思議」

3月8日、京都大学大学院医学研究科腎臓内科学講座の柳田素子教授をお迎えし「腎臓病を治る病気にする」ことを目標に取り組み現在の研究について、ご自身のキャリアや腎臓内科講座のスタートアップから現在に至るまでの状況をお話いただきました。最後には参加者から研究や講座運営にまつわる幅広い質問や意見交換が行われるなど、有効なロールモデル提示の場となりました。

「女性医師・研究者の視点で医療政策を考える」

3月24日、厚生労働省医療技官としての勤務経験をもつ坂元晴香氏をお招きし、医師をめざしたきっかけや厚生労働省出向時代の医療政策のお話、ハーバード公衆衛生大学院への留学、イランでの生活など、多彩なご経験から学んだことを教えていただきました。女性であるがゆえの自由なキャリア選択を確かな経験として積み重ねることでより魅力的な人生に結びつけられている姿が印象的でした。



## 帝京で働く女性のためのカフェタイム

毎月8日は女性医師・研究者支援センターのカフェタイムの日。帝京大学の女性教職員や学生、ときにはイクメンが集まって、ランチやティータイムを楽しむ交流会を開催しています。分野・年代の異なるさまざまな人との気やかな会話の中に、新たな気づきや仕事や生活に関するちょっとしたヒントが隠れていることも。ゆるやかなつながりが心地よいひとときです。



## 医学生・研修医等をサポートする会

3月19日、板橋キャンパス臨床大講堂において「医学生、研修医等をサポートするための会」を東京都医師会、帝京大学医学教育センター、帝京大学女性医師・研究者支援センターによる共同開催にて実施、当日は170名を超える参加があり大盛況となりました。医学部眼科学講座主任教授溝田淳先生による基調講演に続き、3名のロールモデルにご自身の経験を通じたさまざまなキャリアパスの可能性をご紹介いただきました。

## 女子高生サイエンス・キャンプを開催

8月5日、理工学部（宇都宮キャンパス）において、女子高生対象サイエンス・キャンプ「女性科学者のタマゴになろう！」を実施。教員や学生と交流しながら実験を行い、大学での学びを体験しました。午前中は「最先端の科学技術に触れてみよう！」と題して、「酵母の成長をあやつろう！」（高山優子講師）と「脳を構成する細胞を見よう！」（平澤孝枝講師）の2つの講座に分かれ、大学の授業さながらに実験・実習を、午後は「女性研究者・技術者と話そう！」と題し、各自で「未来開拓ノート」を記入し発表を行い、自分の将来や、今やるべきこと・準備しておくことについて考えました。